

歳は50をすぎますが、東経大に勤めて2年目の新米です。「研究室から」というコラムで最近の研究について書け、と指定されましたが、ぼくは研究室で研究をしたことはありません。とはいっても、けっして現在の狭くて古い研究室の居心地の悪さを皮肉っているわけではないのです。そつする習慣が身につかなかっただけのことです。

理由は、大学にいる時間を必要最小限にと考えているからです。本を読むにしても、原稿を書くにしても自分の家でなければ落ち着きません。

とは言え、研究室を利用しないわけはありません。一番は大学院の授業、それに人数の少ない時の学部のゼミ。実は、ぼくは研究室以上に教室が嫌いなのです。学生達も研究室では教室とは違う顔を見せます。珈琲を飲んだりお菓子を食べたり。最近の学生に発言させたり、議論をしあったりさせるためには、何よりリラックスや互いの距離を縮める工夫が必要です。それに、話題に関連する本をすぐに示して、必要なら貸し出すことができますし、ビデオを見せることなど、融通が利きます。

しかし、研究室は何より研究するところですから、わいわいがやがやというわけにはいきません。しーんとするのも困りますが、うるさくなるのも避けなければなりません。研究をしている他の先生

のじゃまをしたら叱られますから。

じゃまといえはもう一つ。ぼくにはいつでもどこでも音楽を聴きたがるという癖があります。これは高校生くらいからの習性ですが、ぼくは「ながら族」の第一世代なのです。当然、研究室でもCDをかけているのですが、音量はもちろん控えめです。しかしぼくが好きな音楽はロックですから、小さな音では今ひとつ満足できません。ぼくが研究室に長居する気にならない本当の理由は、何よりボリュームを上げられないところにあるの

研究室から

渡辺潤



コードの発明によって大きな変化をしたものですが、それはまた、映画やラジオ、そしてテレビになくはならないものとしてもはややされてきました。そんな音楽と「メディア」の関係は、これまであまり本格的には研究されていない分野でした。

ロックはまた、若者の聴く音楽ですが、この「若者」という存在も20世紀の後半を特徴づけるものの一つです。すでに身体的には大人になっているのに、相変わらず大人に保護されて、自らの力で

かもしれません。

研究室でロックなどと書くと、不真面目な教員だと思われるでしょうが、実はそれが、ぼくの最近の研究テーマなのです。と言つと、いつそう不快感をもたれる心配がありますから、いいわけをおきます。

ロックは50年代に登場した音楽ですから、すでに半世紀という時間を経過しました。20世紀は映画、ラジオ、テレビと次々に新しいメディアが登場して、社会や人びとの生活、そして何より意識に大きな影響を及ぼした時代です。音楽もレ

定はしません。現代という時代は、政治や経済、あるいは社会について型通りの切り口で分析しても、なかなかその実像は見えてこないんですよと言つことにしています。

このようなテーマは学生にも興味をもたれます。しかし、大事なのは好きな音楽についてあれこれ考えるだけでなく、それが生まれてくる仕組みや背景に目を向けること。つまり、結局は社会や政治や経済について知らなければならぬのです。学生達の関心をどつやつて、そこまでもつていくか。これはなかなか大変な作業ですが、本にまとめるにしても、直接話すにしても、工夫のしがいのあるところだと思えます。

『アイデンティティの音楽』はもちろん、学生だけのために書いたものではありません。ぼくはむしろ同世代の人びとに読んでほしいと考えています。つまり、青春時代にビートルズを聴いたはずの、父兄の方々にこそ、この本の読者になってほしいのです。ぜひお読みになって、自分自身の歩いてきた道筋と、子どもたちのいる場所について考える機会にしてほしいと思います。

なお、研究室からはホームページも発信していますので、インターネットからも訪ねてください。

URL=<http://www.tku.ac.jp/jwvat/>